

# 両活用形容詞「うたてし」について

——平家物語を中心に——

村田 菜穂子

はじめに

本稿は、両活用（ク活用・シク活用）形容詞について、これまで述べてきた拙稿（一）「ク活用「イカメイ」とその周辺——両活用の形容詞へク活用の後出の場合——」、同（二）「虎明本狂言集の「フカシイとフカイ」、同（三）「両活用形容詞からシク活用形容詞へ」を承け、引き続き、元来ク活用であったものが二次的にシク活用にも活用した形容詞（「二次的シク型」）であるところのウタテシを中心に考察しようとするものである。

では、これまでの拙稿の内容を簡単に述べておこう。

まず、拙稿（二）では、本来シク活用にはたらいっていた形容詞が臨時的にク活用に変容する場合について取り挙げた。考察の結果、このタイプの変容を見せる形容詞には、形容動詞またはそれに相当する語との対応が存していることをつきとめ、後世ク活用にはたらく形容詞（「二次的ク型」）が形成された経路が、

シク活用——二次的ク型

ではなく、

シク活用

形容動詞——二次的ク型

であることについて言及した。

続いて、拙稿(二)では、虎明本狂言集の中でとりわけ特徴的な表現形式をとるフカシイに焦点を当て、フカシイが現れる文の構造的特徴から、その意味が「程度」もしくは「評價」の意に用いられていることについて論述した。

また、拙稿(三)では、二次的シク型の中で後世シク活用へ転じきつてしまう形容詞(「変化形」)を取り挙げた。変化形には、確固とした本来の形式を見失った果ての混乱からシク活用に転じてしまう場合(カマビスシ・イチシルシ)、そして、情意的意味を表現するようになった「まちどほに(なり)」がその意味を形態に反映させた場合(マチドホシ)があり、一律には捉えられないものの、本来の活用形式(「本来形」)に依存することのない関係性の上に成立しているものであるという共通点が見出せることを指摘した。

なおその折、マチドホシの前身「まちどほに(なり)」と非常によく似た諸特徴を示す語——「うたて」について少々述べるところがあったが、同じ二次的シク型とはいえ、マチドホシが変化形であるのに対し、「うたて」は、臨時的にシク活用にも活用するものの、結局は本来形(ク活用)に戻ってしまうもの(「変容形」)であるので、変化形だけを取り挙げた拙稿(三)では、中古における二者の類似点を指摘するに止め、詳

しくは別稿に譲ることにした。

本稿では、「うたてし」を中心にその変容形と本来形(加えて同根の形容動詞「うたてげなり」とを対比し考察する一方で、情態的意味を表す連用語——「まちどほに」・「うたて」が述語性を顕在化し、さらには情態的を形態に反映する派生の有様と類似性を示しつつも、前者は変化形マチドホシ、後者は変容形ウタテシとに分れるに至った理由を含め、変容形ウタテシについて私見を述べてみたい。

差し当って、平家物語には都合良く「うたて」がク活用・シク活用・形容動詞の三形式で揃って現れているので、まずはこの平家物語における三形式の具体的文例を挙げ、それらの特徴を観察することにする。(なお、テキストには日本古典文学大系「平家物語 上・下」を用いた。)

—

まず、シク活用ウタテシを挙げる。

〔ア〕

① 信連申けるは、「只今御所へ官人共がむかへにまいり候なるに、御前に人一人も候はざらんが、無下にうた

てしう覚候。……」

〔卷第四〕

② 海道宿々の遊君遊女ども「あないま／＼し。打手の大將軍の矢ひとつだにもゐずして、にげのほり給ふうたてしよ。……」

〔卷第五〕

①の「うたてしう」は「覚ゆ」という動詞を修飾している。

通常、動作性概念を修飾限定するのは情態性概念であり、この場合もそうであるのだが、注意しなければならないことは、このウタテシが動作や作用を表す動詞ではなく、「覚ゆ」という思考判断を示す動詞を修飾しているということである。すなわち、①の「うたてしう」は後続の動詞の、動作の情態や作用の結果を表しているのではなく、「覚ゆ」という主体の思考——感情に基づく——についての情態を表している、つまりは、言語主体である発話者の思考という「情意の内容」を表していると考えられる。

ところで、語の意味・機能は、その語の形態的特徴と深く連関するものである。情態の意味を表す形容詞はク活用に活用するものが多く、一方、情意的意味を表す形容詞はシク活用に活用するものが多いという傾向を示す。また、構文上の特徴として、ク活用形容詞を述語とする形容詞文（情態性形容詞文）は、モノ的内容を示す主語と相関する。つまり、モノである主語の

属性の一つがク活用形容詞によって表される。従って、主語——述語の間には有縁性が存することになる。一方、シク活用形容詞を述語とする形容詞文（情意性形容詞文）では、主語である言語主体の情意が述語であるシク活用形容詞によって表されているのであり、主観に基づく情意と主語との間にはもちろん有縁性など存することはなく、情意の起縁となるコトガラの内容をもつ対象語（句）をとる、というのが両者の基本的な意味構造である。

また、形容動詞の語幹は極めて独立性が高く、名詞との区別が問題とされることが多いが、つまりはそれだけ実体との間に認め得る有縁性が濃厚であると理解することが出来る。とすれば、形容動詞は語幹の独立性の高いク活用形容詞の延長上にある、ク活用形容詞以上にそれが呈する特徴をもっていることが可能かと思われる。

文例①に話を戻すと、①は具体的には、「信連」という言語主体は「御前に人一人も候はざらん」コトが「うたてしう覚ゆ」という意味構造であると解釈される。要するに、①は、言語主体——対象（情意の起因）——うたてしう覚候という、まさしく情意性形容詞文が呈する構造上の特徴を備えているのである。

②「うたてしき」は、品詞論のうえからは名詞ということになるが、名詞を構成する接尾辞「き」は形容詞の語幹に下接されるものであるから、このウタテシをシク活用形容詞の語幹用法として扱えることが出来るので、シク活用の例としてとりあえず①に準じて見ておく。具体的に文例②の意味構造を解釈すると、「海道宿々の遊君遊女ども」という言語主体（発話者）は「(打手の大將軍の)にげのほり給ふ」コトが「うたてし」ということであり、喚体の句であるか述体の句であるかということを描けば、①と同様②の例も、確かに情意性形容詞文の基本構造をとっている。

さて、右に示したような情意性形容詞文に相当する表現形式は、形容詞以前の「うたて」がすでに中古において成立させていることが北澤尚氏（註）によって報告されている。それによると、中古の主な仮名散文資料では、「うたて」の直後に生起する動詞のほとんどが思考・発話などの言語活動を表す類に偏している」ことが指摘されている。北澤氏の調査では、「うたて」は、特に思考、すなわち「思ふ」系の動詞と共起することが多く、へうたてと思ふへうたて思ふ型の構文を構成することを述べつつ、この型の意味構造が、「性状詞(形容詞・形容動詞の類)」を承ける「思考活動を表す動詞類」の文の意味構造、

〔主体〕——〔対象・誘因〕——性状詞  
 終止形と  
 連用形 思ふ

に合致すると述べている。先に見た二次的シク型である例①でも、ウタテシは「思ふ」系の動詞「覚ゆ」と結び付きつつ右と同じ意味構造をとっており、①「うたてしう覚ゆ」がこの型の延長上にある類型であると見做される。また一方、拙稿(三)で取り挙げた、変化形マチドホシを派生するところの前身「まちどほに・まちどほなり」が、やはり同じく「思ふ」系の動詞と結び付き「X△言語主体——思考誘発の起因・対象——まちどほに+思ふ/まちどほなり+思ふ」という意味構造にある文を形成している。

なお、「まちどほに(なり)」と「うたて」との間に、極めてよく似た経緯が認められることについては、すでに拙稿(三)で述べたので繰り返すことは避けるが、ここで述べたいことは、「思ふ」系の動詞を修飾する情態語(性状詞)は、「思ふ」という主体の思考の情態、言いかえると、主体の感情に関わる情態、すなわち(情意)の内容を表現するものであり、「うたて」・「まちどほに(なり)」という形式において両者にはすでに情意性が見出せるということである。

かくして、副詞として出発した二者、「うたて」・「まちどほに」が、共に二次的にシク活用形容詞を派生し、しかも、それに至るまでに同じ経路が認められること、言いかえると、情態の意味を表していた連用語が情意性を獲得するに当っての生い立ちに共通性が見出せることは、大変興味深い事柄であり、押さえておく必要があるだろう。

もつとも、両者を大きく分ける点がある。すなわち、マチドホシはシク活用へ転じきってしまう変化形であるのに対して、ウタテシは臨時的にシク活用にもはたらく変容形であるという点である。この大きな違いを生んだ理由は何であろうか。この点を解くためにも、つぎにク活用「うたてし」の例を検討する。

二一

(イ)

③ 今度も重科の輩おほくゆるされける中に、俊寛僧都一人赦免なかりけるこそうたてけれ。〔卷第三〕

④ 今度さしも目出たき御産に、大教はをこなわれたりといへ共、俊寛僧都一人、赦免なかりけるこそうたてけれ。〔卷第三〕

⑤ 俊寛僧都一人、うかりし鳴の鳴守に成にけるこそうたてけれ。〔卷第三〕

⑥ 新大納言も、かやうに賢きはからひをばし給はで、よしなき謀反をおこいて、我身も亡、子息所従に至るまで、かゝるうき目をみせ給ふこそうたてけれ。〔卷第二〕

⑦ いかなれば、小松おとゝはかうこそゆ、しうおはせしに、宗盛卿はさこそなからめ、あま(ツ)さへ人のおしむ馬こひと(ツ)て、天下の大事に及ぬるこそうたてけれ。〔卷第四〕

⑧ 宮ははや光明山の鳥居のまへにてうたさせ給ぬ(中略)いま五十町ばかりまちつけ給はで、うたれさせ給けん宮の御運のほどこそうたてけれ。〔卷第四〕

⑨ …さておはすべかりし人の、よしなき謀叛おこいて、宮をもうしなひまいらせ、我身もほろびぬるこそうたてけれ。〔卷第四〕

⑩ 主上のいまだ御元服もなき程は、御童形にてわたらせ給ふをしらざりけるこそうたてけれ。〔卷第八〕

⑪ 能貝このよし申さんとて、御まへにまいりたりければ、ゐなをり限り給ひけるこそうたてけれ。〔卷第十一〕

「イ」の例が皆「こそ……うたてけれ」の形式を備えていることもさることながら、「イ」の構造上の特徴は、述語「うたてし」に対して、コトガラの意味内容（コト性）をもつ句が主語として相関していることである。具体的には、例文③④⑤の傍線部がそれである。

このように、主語がコトガラの意味内容をもつという特徴は、ウタテシがシク活用でいられた文①②においても見られるものであったのだが、「うたてし」という思考判断を行う主体が、「ア」では文に現象しているのに対して、「イ」ではそれが現象していない。つまり、会話文という文形式の中でウタテシが現れる（ア）では、思考判断（情意）の主体が発話者として文に現象すると同時に情意の起因・対象が明記されていた。一方、「うたてし」が地の文に現れる（イ）③④⑤では、作者という主体が常に第三者的に、客観的判断を行っている立場をとっているために、「うたてし」という思考判断の主体が顕在化されない、いっそ消去される文形式がとられている。従って、「イ」と（ア）とを比較すると、「イ」の方が（ア）に比べてやや客観性が高い判断を示す文ということになる。

とは言うものの、「イ」も（ア）と同じくコト性を示す句と相関し、そのコトガラに対する思考判断を表している点では共

通しており、後で取り挙げる（エ）——モノ性を示す主語と相関する——ク活用「うたてし」とは大きく異なっていると見做される。語レベルの主語（体言）と相関しその属性を表す形容詞が情態性形容詞の典型であり、句レベルの意味内容をもつ主語と相関しそのコトガラに対する思考判断の在り方を表す形容詞が情意性形容詞のそれであるとするならば、「ア」（イ）の「うたてし」は情意性形容詞と把握するのが適当であろう。

ただし、情意性形容詞と一口に言うもののそれを述語とする文において、主語主体が文に現象しているか（ア）、あるいはそれが文から消去されているか（イ）の違いは、「うたてし」の意味の差違として把握されねばならない。

さて、情意性形容詞文は、一般的に感情形容詞文、評価形容詞文、さらには程度形容詞文に分類される。川端善明氏は、情意性形容詞文の一つである評価形容詞文について、「主語面をことさらに構成」し、言語主体が「文に現象しない」という特徴を示すことから、「意味的には情意性形容詞文と等価で、形態的には情態性形容詞文に似通う」ことを指摘された。そして、評価形容詞文を情意性形容詞文と情態性形容詞文の「中間形式」として位置付けておられるが、まさに（イ）の例は、こうした中間形式をとる評価形容詞文の特徴を認め得るものであつ

た。

(ウ)

⑫ 岸に二丈ばかりありける下にひしをうへて、うへよりつきおとり奉れば、ひしにつらぬか(ツ)てうせ給ひぬ。無下にうたてき事共也。

〔巻第二〕

⑬ 心ならず尼になされて、年廿三、こき墨染にやつれて、嵯峨のへんにぞすまれける。うたてかりし事共なり。

〔巻第六〕

(ウ)は、ク活用「うたてし」が所謂形式名詞を修飾した例である。形式名詞とは極めて抽象的な概念しか示さず、それ自身は実質的な意味に乏しいものである。

⑭⑮の場合、形式名詞コトの実質的な意味内容は、⑫「ひしにつらぬか(ツ)てうせ給ひぬ」、⑬「心ならず尼になされて、嵯峨のへんにぞすまれける」であり、意味的には句に等しい内容を含んでいると考えられる。しかも、両例ともに、思考判断の主体が消去される文形式をとっていることから、右に示した(ウ)の例も(イ)と等価な評価形容詞文と捉えることが出来る。

⑭ 既武士共のちかづく由聞えしかば、かくて又はちがましく、うたてきめをみむもさすがなればとて十なり給

ふ女子、八歳の男子、車にとり乗せ、いづくともなくやり出す。

〔巻第二〕

また、⑭では、境遇や事態などの意を示す「め」という語を「うたてし」が修飾している。現代語でも「ひどいめ／つらいめ」などという表現が見られるが、この語も先のコトと同じく実体のあるモノを示すのではなく、佐久間鼎氏が「事態・様態」を示す形式名詞の一つと扱っておられるように、この「め」という語は、形式名詞コトよりも多少意味内容が限定されるものの、普通名詞とは異なって抽象的な意味内容を示すに止っている。

程度の差こそあれ、⑫⑬及び⑭のように、「うたてし」の被修飾語(述定に転換すれば主語)が意味的には句相当のコト性を示すものであるということは、これらの例が質的には(イ)の例と一つに括り得るものと考て良いだろう。

ところで、「うたてし」を述語とする形容詞文の中で、言語主体が文に現象し、構造的には、(ア)と同様に情意性形容詞文の特徴を呈しているものの、「うたてし」の活用が(ア)のようにシク活用にはならず、ク活用のままで用いられた例がある。

(ア)

⑮ 三位中将の給ひけるは、「…かく心うきありさまにて

いくさの陣へおもむけば、具足し奉り、ゆくまもしらぬ旅の空にてうき目をみせ奉らんもうたてかゝるべし。

〔卷第七〕

⑮ とわり武里もおなじく入らんとしけると、聖とりと、めければ、ちからおよばず。「いかにうたてくも、御遺言をばたがへたてまつらんとするぞ。」〔卷第十〕

右の二例は、〔ア〕と同じく会話文中に「うたてし」が現れる場合であり、その思考判断の主体が、発話者として文に現象している（二重傍線部）。情意性形容詞文の中でも、言語主体が消去されている〔イ〕の「うたてし」との違いがここに存するのであり、〔ア〕は言語主体が文に現象している分、「うたてし」の意味が主観性を濃くしていると考えられる。実態としては、意味と形式とが即対応する場合はかりではなく、「うたてし」が活用形式をとりつつも、意味構造的には評価形容詞文（〔イ〕）（〔ウ〕）よりも主観性の高い情意性形容詞文（〔ア〕）の特徴を満たしている場合も存している。

三

〔エ〕

⑰ 「下藤こそ猶もうたてけれ。今はたゞ後世をとぶら

ひたてまつれ」となくく教訓しれども〔卷第十〕

⑱ 凡はさい後の所勞のありさまこそうたてけれ共、まこ

とはたゞ人ともおぼえぬ事共おほかりけり。

〔卷第六〕

〔エ〕の構造上の特徴は、述語「うたてし」に対して、実体的あるモノを示す体言が主語として相関していることである。具体的には、⑰「下藤」、⑱「清盛の」さい後の所勞のありさま」という体言がそれぞれ「うたてし」の主語であり、述語「うたてし」はそのモノである体言の語々の在り方（屬性）の一つ——客観的な情態の一つを規定していると考えられる。こうした点において、〔エ〕は先の〔ア〕や〔イ〕とは大きく異なっているものであり、まさしく〔エ〕は先に述べた情態性形容詞文の最も典型的な意味構造を呈しているのである。

では次に、形容動詞「うたてげなり」の例を見ることにする。

〔オ〕

⑲ 武士共うち入てさがすものならば、うたてげなる御ありさまどもを見えさせ給ひなんぞ。〔卷第十二〕

右の「うたてげなる」は、すぐ下の体言「御ありさまども」を修飾し装定の句を構造しているが、意味的には、「御ありさ



まども(主語)——うたてげなり(述語)」という述定の句と等価なものである。また、「御ありさまども」とは、具体的には「武士共うち入てさがす」という有様を指し、この有様の在り方、すなわちその情態が、「うたてげなり」というのである。従って、意味構造上、「オ」の例は(エ)と質的には通っている文として位置付けてよいだろう。

以上、「うたてし」がク活用・シク活用の形式で用いられる場合と同根の形容動詞「うたてげなり」の形式で用いられる場合とについて、意味構造における特徴を観察し考察を進めてきた。そこで、三形式の間に意味構造における連続性を見出すことが出来た。つまり、モノの情態を表す客観的なク活用「うたてし」(エ)及び形容動詞「うたてげなり」(オ)を一方の極に、また、コトカラに対する言語主体の情意を表す主観的なシク活用ウタテシ(ア)をもう一方の極にして、言語主体が消去されている分(ア)よりも客観的な(イ)(ウ)が両者をつなぐ「中間形式」として位置すると考えられるのである。ときとして、ク活用形式のままでも情意的意味を表す「うたてし」(ア)もあったが、基本的にこれらの形式——(ア)(オ)は情意から情態への流れにおいて把握されるのである。

#### 四

さて、一般的に、他の品詞から形容詞が二次派生される場合、概ねその形容詞はシク活用に活用する。従って、「うたて」・「まちどほに」から形成される形容詞は、通常ならばク活用ではなくシク活用にはたらくべきところである。にもかかわらず、実際には形容詞の形式を得た当初、両者はク活用にはたらくている。なぜそうなったのであろうか。

拙稿(三)でも述べたように、「まちどほに(なり)」はすでにこの形式で情意的意味を表現している。従って、それが二次的に形容詞を派生しようとするとき、形容詞における意味と形式との一般的傾向性への順行——シク活用にはたらくことが穏当であり、むしろ期待されるところであったはずである。ところが、それは阻まれ、直ちに実行されなかった。というのも、基本語彙とも言うべきク活用のトホシが存在していたからである。ク活用トホシが存在したために、「まちどほに(なり)」はまずその形式を踏襲する形容詞を派生したのである。とは言っても、ク活用マチドホシは今のところ辞書にのみ見出し得た形式であり(文明本節用集・日葡辞書補遺)、それを踏まえて言

うならば、ク活用マチドホシはク活用トホシに引かれて形成されたものの、実際に具体的な言語活動の場において用いられたかどうかについては些か疑問である。

つまり、ク活用マチドホシはク活用トホシの活用に倣って造語された抽象的な臨時形でしかなく、マチドホシ以前の元の語が内的に求めるところは、ク活用ではなくシク活用形式であり、結局はそれに転じてしまふと考えるべきであろう。

次に、「うたて」がク活用にほたらいた事情について考える。

前掲北澤氏論文によると、中古における「うたて」は、情態の意味と情意的意味の両方の意味で用いられる語であつたらしい。もっとも、上代の「うたて」は、大半が感情の有様や状態の程度規定をするものであり、ときとして、「宇多豆物云ふ王子ぞ」(記・下 安康天皇)のように、情態的な意味を表すこともある。「相反する二元的性格」を示す語であつたと言ふ。このように、派生以前の「うたて」に混質的な意味が存していたということは、「うたて」自身、ク活用にもシク活用にも馴染みやよい性質をもっていたということになる。北澤氏が言われるように、「うたてあり」が「うたて」の情態性の顕在化された形式であるとするれば、もう一方の意味を顕在化させるためには、「うたてし」はむしろシク活用に活用すべきであるように見え

る。ところが、「うたてし」はク活用の形式を得ている。

なぜ、そのようになったのであろうか。そうなった背景には、派生以前の「うたて」が、<sup>生</sup>「あなうたて」<sup>生</sup>「うたての」<sup>生</sup>という型で多く用いられたことが大きく関与しているのではないか。要するに、「うたて」がク活用形容詞の語幹用法に相当する型で多用されたことから、「うたてし」はク活用として成立する経路をたどつたのである。

だが、「うたてし」がク活用に落ち着いたからといって、その混質的な意味を示す性質が一掃されたというわけではなく、これまで見てきたように、平家物語では、「うたてし」はク活用という形式で情意的意味(⑮⑯)や評価的意味(③④)を表している。そしてまた、情意性が最も強く現れる文構造においては、シク活用ウクテシを成立させている。別の言い方をすれば、このウクテの情意性の濃厚さは、所謂語幹の「シ」を得て、一層明確なものになっている。

ところがしかし、橋本四郎氏<sup>生</sup>が言われるように、本来語幹の「シ」は語幹安定化の要素であつて、それ自身には情意的意味はなかつたと考えられる。すなわち、「シ」を必要とする語が、情意的であると同時に独立性の弱い形態であつたために、結果的にシク活用形容詞には情意的な語が多くなっている。

さて、平安時代以降において、形容詞の造語は、語基的なものからよりも、むしろ他の品詞からの二次的派生によって展開される。例えば、モノ的概念を示す名詞からサマ的概念を示す形容詞が派生される場合、それがク活用ではなくシク活用するのは、元の形態が独立性の弱い形態であり、安定化のために「シ」という要素が必要であつたからではない。一つには、語幹用法と元の名詞との一致を避けるという側面があつたかもしれない。だが、このサマ的概念が情態性のもを意図したのであれば、シク活用形容詞——情態的意味という傾向性に背く派生をあえて選んだことになる。再編成された語が、元の名詞との区別を保持しつつ、情態的な意味を表そうとするならば、シク活用形容詞よりも形容動詞の方が選ばれるべきではなかつたか。ここでシク活用形式が選ばれたのは、シク活用形容詞が得意とする情態的な意味を表そうとしたからであつたと考える。

シク活用形容詞——情態的意味という傾向性がある程度の浸透を見たとき、シク活用形容詞の情態性が、ク活用形容詞の語幹末には決して現れることのない「シ」という音節によって付与されているかのごとくに理解されたのではあるまいか。山本俊英氏や石井文夫氏の理解がまさにそれである。

また、院政期頃から見えはじめる「—シシ」語尾も、一つに

は語幹の「シ」の有無に対する意識の高まりを物語っているものであろう。

そして、こうした理解が本来語源俗解であつたにせよ、それが社会性を得たあかつきには、この「シ」は情態性を示す要素として展開していく。まさに、シク活用のウタテシはこの原理に従つて形成された情態性の形容詞であつた。

ちなみに、シク活用のウタテシは、平家物語以外にも多数見え、特に「ウタテシキ事(物由)」のように形式名詞と結び付いて用いられた例が多いが、大筋はこれまで述べてきたことが当てはまると考えてよいだろう。

⑳ 近年我朝ノ人ノ有様程ウタテシキ事ヲバ不<sup>ク</sup>承<sup>ル</sup>。

〔太平記卷第三十九〕

㉑ 仍此国の民の愁は、うたてしき事に可<sup>レ</sup>有候。

〔淡柿 文覚上人消息〕

㉒ その分にてよかりしを、なをうたてしき事におもひつ、け、うらかたする人のもとに行、過にし夢をあはされよといへは

〔醒睡笑 一〕

㉓ けにもうたてしき物は名利の二也。

〔撰集抄 一〕

㉔ 俊成卿の女、入堂のつみてに人をつかはして、さしもあかき月をもみぬ、うたてしきよし申されて侍し

改めてここで、全体を通してまとめると、形容詞「うたてし」以前の「うたて」は、本質的に情感的意味と程度的意味という両義性を備える混質的な語であった。つまり、「うたて」自身、ク活用にもシク活用にも馴染みやすいという因子を内在していたのである。こうした「うたて」がク活用の形式に落ち着いたのは、中古において「あなうたて」「へうたての」<sup>1</sup>という、ク活用形容詞語幹に相当する用法で多用されたことが契機になっているにちがいない。

そして、やがて「うたて」の情意性は、中世（鎌倉時代）に顕在化しシク活用ウタテシが形成される。しかし、それは臨時的な形式でしかなかった。ウタテシが、マチドホシのように変化形にはならず、変容形に止っていたのは、「うたてし」には本来形（ク活用）として用いられた文例が相当数見出せること、つまりは、本来の形式に対する認識の定着度、または語の歴史性が確かなものであったためであると思われる。

一方、これに対して、マチドホシがシク活用に落ち着く変化形であるのは、本来形「まちどほし」がわずかに辞書に見出せる限られたものでしかないこと、つまりは、それこそがク活用にトホシから類推されて形成された臨時形であり、非実用的な語

であったためであらう。

注

- 1 「国語語彙史の研究」十〔1989・12 和泉書院〕
- 2 「日本近代語研究」二〔1994・3 ひつじ書房発行予定〕
- 3 「国語語彙史の研究」十四〔1994・5 和泉書院発行予定〕
- 4 「共時過程と文法記述——「うたて」について——」〔国語学 百四十三〔1985・12〕〕
- 5 「文の構造と種類——形容詞文——」〔日本語学 二一五〔1983・5 明治書院〕〕
- 6 「現代日本語法の研究」〔1942・12 厚生閣〕四百四十四頁。
- 7 「あなわびし、あなうたて」と、いとほしくて腹立（て）ど、動きもせず抱きこめられて、かひもなし。」〔落窪物語 一〕「中世「うたて」の御聖心や」〔源氏物語 東屋 7・1〕
- 9 「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」〔国語学 二十三〔1955・12〕〕
- 10 「形容詞の意味と活用」（未定稿二）〔1955・9〕